

第15回 神戸女学院大学 絵本翻訳コンクール 優良賞

野田学園高等学校 1年 石田雅道・内山凜夢訳

ぼくたちのいえ

アーノルドはいつも ふねにのって うみに でかけていた。

アーノルドにとって うみは ともだちだった。でも そんな あるひ、 おおきな なみが アーノルドの ふねに おそいかかってきた。アーノルドの ふねは うみに しずんでしまった。

でも あんしんして、アーノルドは うまれつき ながい はなをもっていた。シュノーケルみたいにつかえば、ほら おぼれずにおよぐことができる。

ながい あいだ なみに ながされて、アーノルドは とってもちいさな しまに たどりついた。

アーノルドは むかし ふなのりの おじいさんが よんだ しをおもいだした。

「ひとり さびしく みわたすはひろいうなばら それだけさ！」

でも あんしんして、アーノルドの はなは おおきな おとを だすことができた。トランペットみたいにつかえば、ほら とおくまで こえを とどけることができる。「なんていう きよくなの？」 いっぴきの さかなが アーノルドに たずねた。

「SOSだよ」アーノルドは いった。「たすけを よんでいるんだ」でも、だれも アーノルドを たすけに きてくれなかった。

アーノルドが もういちど しまの まわりを みていると、ちょうど そこに アーノルドの キャプテンぼうしが ながれてきた。

アーノルドは ぼうしを ひろいあげ あたまに かぶった。と、そのとき すいへいせんに ちいさな ふねが うかんでいるのが みえた。

それは ネズミの ふねだった。

やっと たすかった！ と おもったのに...

アーノルドは できるだけ たくさん ふねの かけらを ひろいあつめた。

さすが ふなのりの アーノルド、ひもの むすびかたを たくさん していた。

それから すぐにとしよりの イヌが ふねに のって やってきた。

アーノルドは そっと ふねに のりこんだけど...

わあ！ また ふねの そこが ぬけてしまった。

ふたりに たすけてもらって、アーノルドは しまを おおきくすることができた。

つぎの ひの あさ、さかなつりの ふねが ものすごい はやさで しまに ちかづいてきた。

なのに またも やだいしっぱい！ ふねは こわれてしまった。

みんなは ぶじに しまの うえに あがることができた。

アーノルドは どんなものにも つかいみちがあることに きがついた。たとえ それが こわれた ふねだったとしても。

そのよる、ぎんいろに かがやく つきあかりの したで、アーノルドたちは おどった。

そして、ひとばんじゅう クジラたちから おしえてもらった うたを うたった。

アーノルドたちの すてきな うたごえは すぐに みんなの ところへ ひびきわたった！

みんなは すぐに アーノルドたちの しまを めざして ふねを こぎはじめた。

アーノルドは よろこんで みんなを むかえいれた。「ここには いつだって みんなの へやがある」

でも そんな あるひ、そらが まっくろに そまった。なぜが つよく ふきつけ、うみは ひどく あばれだした...

みんなが、アーノルドをみていた。

もういえにかえらなきゃいけないのかな？

「このしまをまもりたい」アーノルドはいった。「ぼくにいいかんがえがある」